

平成24年度沖縄群島病害虫発生予報第8号(11月予報)

I 11月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	40	30
平年並	30	30	40
低い(少ない)	50	30	30

(平成24年10月26日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

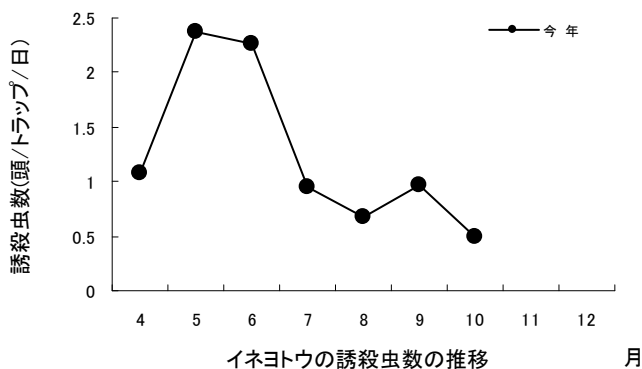
	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	22.1	24.6	19.9	110.2	123.0

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 11月の発生予報および防除上の注意事項

1 さとうきび

- イネヨトウの防除対策
 - a 10月下旬の調査の結果、新植夏植圃場における芯枯茎率は0.1%(前年1.3%、平年0.7%)と平年より低かった。
 - b 10月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.5頭であった。
 - c 与那国島において、イネヨトウの被害が多発した際の誘殺虫数は2頭以上であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 植付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- e 平成24年度病害虫発生予察技術情報第5号参照(平成24年9月21日付)。

- トノサマバッタ・タイワンツチイナゴの防除対策
 - a 10月下旬の病害虫防除員からの報告によると、沖縄本島南部の一部圃場でタイワンツチイナゴ、伊江島・南大東島の一部圃場でトノサマバッタの多発生がみられた。
 - b 成虫が不活発な朝夕を中心に薬剤防除を行う。
 - c 平成24年度病害虫発生予察技術情報第2号参照(平成24年4月27日付)。

2 かんきつ

- かいよう病の防除対策
 - a 10月下旬の調査の結果、たんかんの発病果率は0%（前年0%、平年8.0%）と平年より低く、シークワサーの発病果率は13.3%（前年2.0%）であった。
 - b 病害虫防除員からの報告によると、発生程度はたんかんで中発生、シークワサーで多発生であった。
 - c 罹病した夏秋枝は翌年の伝染源となるので除去する。
 - d 秋芽のミカンハモグリガの穿孔から病原菌が侵入しやすいので、同虫の防除を徹底する。
 - e 発生がみられる圃場では、薬剤による防除を徹底する。

3 マンゴー

- かいよう病の防除対策
 - a 10月下旬の調査の結果、一部施設で発生が多くみられた。
 - b 台風17号の強風による折損等の傷から細菌が侵入し発病したと考えられた。
 - c 罹病した部位は速やかに施設外に持ち出し、焼却等の処分を行う。
 - d 罹病枝を剪定した器具は消毒する。
 - e 薬剤散布を行うと共に、罹病枝剪定後の切り口に殺菌塗布剤を施用する。

4 かぼちゃ

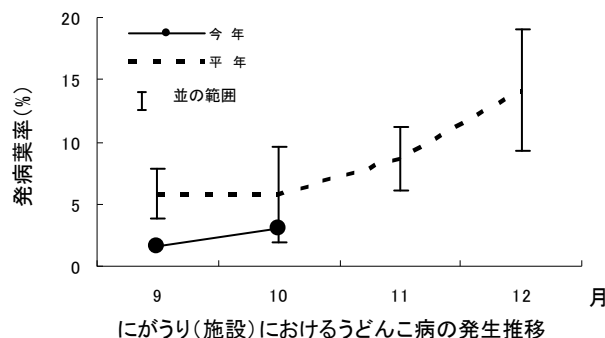
- 定植時および生育初期の防除対策
 - a ウイルス病を媒介するアブラムシ類をはじめ、コナジラミ類、ハモグリバエ類などの防除対策として、定植時に粒剤を施用する。
 - b 害虫の飛来侵入を防止するため、畦ごとに防風ネットを設置するか、防虫ネットによるトンネル被覆を行う。
 - c ウイルス病に感染した株は抜き取って圃場外に持ち出し処分する。健全株への感染を防ぐため、抜き取りは他の管理作業の終了後に行う。

5 にがうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度 : 並
予報の根拠

10月下旬の調査の結果、発病葉率は3.0%（前年4.8%、平年5.8%）と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

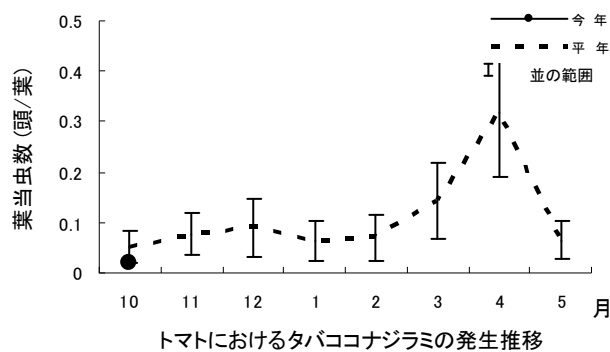
老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。

- 定植時および生育初期の病害虫防除対策
 - a 例年この時期には、ウイルス病を媒介するアブラムシ類、アザミウマ類をはじめ、コナジラミ類などの被害がみられる。
 - b 誘引ネットより下の側枝や葉、圃場内外の雑草は病害虫の発生源となるので除去する。
 - c 定植時に粒剤を施用する。
 - d ウイルス病に感染した株は抜き取って圃場外に持ち出し処分する。また、媒介虫の薬剤による防除を行う。

6 トマト

- (1) タバココナジラミ
発生程度 : 並
予報の根拠

10月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.02頭(前年0.03頭、平年0.05頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 本種はトマト黄化葉巻病を媒介する。
- b 多くの雑草が発生源となりうるので、施設内外の雑草除去に努める。
- c 施設開口部には0.6mm以下の目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
- d 黄色粘着テープ等により、タバココナジラミの早期発見・早期防除に努める。
- e 幼虫は下位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
- f 薬剤散布の際にはマルハナバチに影響の少ない薬剤を選定する。
- g 平成24年度病害虫発生予察技術情報第6号(平成24年9月28日付)参照。

7 小ぎく(年末出荷用)

- アザミウマ類の防除対策
 - a 10月下旬の調査の結果、一部の圃場で発生が多くみられた。
 - b 苗の段階から葉にアザミウマがついていることが多いので、苗床での防除を徹底する。
 - c 定植時に粒剤を施用する。
 - d 採穂後の親株ほ場はアザミウマの発生源となるため、薬剤散布後、すみやかに片付ける。
 - e 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら薬剤散布を行う。
 - f 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
 - g 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。